

「見えないかたちを描く」

ゲスト：山田志麻子（うらわ美術館学芸員）

山田 大学時代から視覚以外の五感について考えていて、2022年に「霧囲気のかたち」という展覧会を企画しました。空気や霧囲気は私たちの生活に大事なものですが、絵画や彫刻でどう表現されてきたのか、関心があったのです。空気を描こうとした動きは明治時代であって、岡倉天心の問題提起に応じて、横山大観や菱田春草らが試みています。もともと日本画は線を繰り返し鍛錬する伝統があるんですけど、それをぼかして色の面で示した。それまでの日本画にはない表現で、「朦朧体」と呼ばれました。西洋の陰影表現を取り入れられないかという流れの延長線上にもありました。その後、武内鶴之助という画家が英国に渡って、雲の表現を学んだりしていますが、先行例としてはターナーがいました。

平丸 35、6歳のときに初めてパリに行って、ルーブル美術館でたくさん画家の絵を観ようとしたとき、ふと後ろを振り返ったらターナーの絵があって、新しい、と思ったんです。もちろんターナーは知っていましたが、ルーブル美術館の具象的な絵を観たあとで、この時代に相当センセーショナルだったんだと思って。大観も春草も、今じゃ考えられないくらい、新しいことをしたんだろうと思います。若林奮さんの彫刻も、物質なのに《霧囲気》というのがよくわからなかったんですけど、「霧囲気のかたち」展を通じて見て、ああ、そうこうことか、と思いました。

山田 私たちは当たり前のように大観の絵を観ていますが、当時は否定されて。この頃の大観は不遇の時代だったんです。ターナーも気が狂ったんじゃないかと言われて。絵画が人物画とか歴史画とか、ある像を写し出すものだったときに、見えないものを描くことはすごく挑戦的でした。「霧囲気のかたち」展を開催した頃はコロナが流行っていて、その前には原子力発電所事故もあって、見えない放射能がどういう風で流れてくるのかという不安もあって、目に見えないものの脅威をすごく感じていた時期だったんです。中谷芙二子さんの霧の彫刻も映像で紹介しました。霧の中に入って包まれることができる作品で、この空間で平丸さんの絵に包まれる感覚にも近いのかなと思います。大正から昭和にかけては空気——気配や印象を写真に定着させようとした人たちもいました。写真をもとに質感や空気を絵画に描いた伊庭靖子さん、毎日のデッサンをもとに夏の暑さをどろりとした心象風景のように表現した牛島憲之さん、大観と同年の小川芋銭も目に見えない精霊などを日常のなかに描いています。そして、さいたま市の画家で点描に取り組んだのが瑛九ですね。

平丸 瑛九はすごく好きで、うらわ美術館と埼玉県立近代美術館の企画展と、東京国立近代美術館のコレクションの小特集も観ました。モノクロ写真を組み合わせたフォトデッサンも好きです。点描は霧囲気だと思っています。小さな点の集まりで輪郭がはっきりしないけど、ひとつの図像になってくる。このあいだ香港のM+という美術館に行ったときにピカソ展をやっていて、1点だけ点描の作品があったんです。えっピカソって点描するの、と思って。それがすごく良くて、この一点を観ただけで来た甲斐があったと思ったぐらいです。

山田 ピカソがいろいろな様式を試している時期で、古典の絵画を点描で描きなおしているんですよ。瑛九も最初は印象派風だったり、幾何学的な抽象を試したりした挙句、死の直前の2年くらいで点描に到達して、一気に昇華する。こういうことが作家にあるんだと思うひとつの例です。点描の色は青と黄色、緑、茶、黒と限られているんですけど、選ぶ色や筆触によって印象がまったく違うんですね。《春》は春の温かさが伝わってくる。《ながれ一たそがれ》は胸をつかまれるような、苦しいような、作品の背後で何かが動いているような気配を感じさせます。

平丸 私は点描ではないですけど、筆触の重なりは点描と一緒にかなと思います。最初に方向性を決めているんですけど、思い描いたイメージに行くまでは時間がかかるんです。最終的に緑にしようと思ったら、最初はピンクだったり黄色だったり、隙間から見える色を先に描いていくんですけど、もどかしい。頭のなかにある図像が見えてくるのは最後なので、気持ちが前のめりになるというか。早く見たい、という感じがある。でも焦って雑になったらダメだと思って、落ち着くんですけど。晩年の瑛九も、点描を描いているときは、気持ちが先へ先へ進んでいるのかなと勝手に思っています。

山田 瑛九は最晩年に電気も蛍光灯に変えて、食事をする時間も惜しんで描いて。筆がすうっと画面に吸い込まれていくんですよ、と言っていたそうなんです。本当に集中して、最後は体調を崩して死んでしまうんですけど、やっぱりイメージがあって、それが実現するまでの距離感がきつとあるんですね。

平丸 私も、同じ色面は、その日のうちに描き終わらないと、次の日になると同じ筆や同じ絵具を使っても、もやっとするので、一気にやるんです。でも大画面になると、一色で6時間くらいかかるんです。だからいつも夜中に制作しています。

山田 そうなんですか。

平丸 昼間は仕事しているんですけど、朝早いわけではなくて、もともと夜に強いタイプなので。朝に描いてみようと思ったこともあったんですが、まず朝は起きられないのと、10時に家を出なきゃいけないのに、9時50分に気分が乗ってくることもあるじゃないですか。そう思ったら、夜中の3時、4時まで描いて、乗ってきたら6時まで描いても、ちょっと寝る時間が少なくなるだけだから、その方が自分のなかでも落ち着く。本当にびっくりするんですよ。2、3時間しか経っていないかと思ったら、もう6時間経ったんだって。こうやって一生は終わっていくのかなって（笑）。

山田 疲れた感覚はあるんですか。

平丸 描いているときはハイテンションなんです。身体は疲れているのかもしれないんですけど、そのあと寝られないですよ。とりあえず横になって、目は冴えわたっている。だから、この歳でも割と二徹とかやっちゃうんですよ。

山田 すごい！

平丸 毎週そんなことやっているわけじゃないです。たまに。

山田 絵具は何層くらい重ねているんですか？

平丸 よく聞かれるんですけど、数えたことがないんですよ。でも30層以上はあると思います。

山田 どの作品もそのくらい重ねているんですか？

平丸 そうですね、ありますね。今回の展覧会のために、この空間をイメージして描いた《とうめいな輪郭》の2点は、見えないんですけど、下にゴールドを使っています。

山田 全然見えないですか。

平丸 もうちょっと見えるはずだったんですけど、そのあと右往左往して。ちょっと違うと思うと、消すじゃなくて、塗りつぶすというか、違う色にしていくので、それも時間がかかるんです。最終的な色のイメージはあるので、最初の段階、次の段階、と考えているんですけど、初めての大きさや色だと、本当にギリギリまでかかって。いろんな人に、あと1週間なのに終わってないって言って、大丈夫？って心配されて。この絵は40層くらいかな、でも一層はすごく薄いんですよ。

山田 あまり凹凸がないですよ。

平丸 薄塗りを重ねることによって、見えてこない色も気配として出てくることを願って描いているんです。見えない色が下にあるおかげで、表の色が見えている。割と重ねることを楽しみながら描いています。

山田 キャンバスの横を見ると、補色というか、同系色じゃなくて、緑と暖色とか、肌色とか、大胆に重ねている。

平丸 それを見せたいので、最近では側面を描かないです。

山田 見え隠れじゃないですけど、多少透明感を意識しつつ、奥の色が見えるようにしつつ…。でも混色ではないですよ。

平丸 以前はオイルパステルを塗り重ねていました。チューブの絵具みたいにパレットナイフで混ぜることはできないので、赤を乗せた上に白を乗せてピンク色にしたりしていたんです。そのときは画面上で混ぜて色を作っていたんですけど、今は基本的に絵具を混ぜることはなくて、オイルをかなり使っているんですが、薄塗りを重ねて色をつくっていくことを意識しています。

山田 メディウムの溶き方とか、計算されているんだろうと思います。

平丸 《山並み/Mountains》は、自然の山の連なりを見た感動を描いたんですけど、力強さを出そうと思って、あえて荒々しい感じにしてみました。

山田 瑛丸にも、おつゆ描きみたいに垂れている絵があります。

この作品は訪れた場所の印象を描いたものですね。

平丸 2023年秋に新潟の池田記念美術館でグループ展があって。会場が広くて天井の高いところだったので、せっかくだから大きい絵を発表したいと思ったんです。美術館の最寄り駅を降りると川があって、平地の先に山が連なっていたので、すごく良い場所だなと思って、この山並みを描こうと。

山田 タイトルが「山並み」というのは珍しいですね。

平丸 いつもは雰囲気的な感じが多いんですけど、この絵ははっきり山を描こうと思ったので、「山並み」にしました。

山田 タイトルは、イメージを限定しない、やわらかな雰囲気が多い。最近の個展のタイトルも……

平丸 今回の個展のタイトルは「とうめいな輪郭」なんですけど、山並みも、稜線があるじゃないですか。でも実際には線は引いていないわけで。遠くから見ると木の集合体で稜線が見えるので、点描といっしょだなと思ったんです。

山田 そうですね。

平丸 線や輪郭がないねと言われることは結構あって。たしかに線はないかもしれないけど、見えない輪郭というか、気配を描きたい。今回は「輪郭」という言葉を入れたいと思ったんですが、輪郭を描いているわけではないから、相反するような言葉である「とうめい」を入れました。「とうめいな輪郭」は、存在しないんだけど。このあいだ東京で開いた個展のタイトルは「夜と夜明け」だったんです。

山田 会期を重ねて、3か所で個展を開催されていましたね。

平丸 夜型で制作することが多いので、早起きじゃなくて朝焼けを見る人が多いんです。いつもきれいだなと思って。今住んでいるのが京都で、賀茂川が近いので、絵を描いていて、もう寝なきゃいけない時間なのに興奮して眠れないときに、賀茂川へ散歩に行ったんですね。そうしたらすごくたくさん人がいます。みなさん、朝5時なのに散歩しているんですよ。昼間もこんなに人がいないのっていうくらい。

山田 朝に人が多いんですね。

平丸 賀茂川の先に山があって、日が昇ってくるときのグラデーションがきれいで、何とも言えない色とか時間がすごくいいな、と。良い意味での曖昧さ。曖昧って否定的に使われることが多いんですけど、とても魅力的な言葉だと思って。それで、曖昧な感じで「夜と夜明け」というタイトルにしました。展示室の中央に片方が《夜》、片方が《夜明け》という2枚一組の作品を置いたんです。

山田 明るい方はいろんな色を使っているんですね。

平丸 だんだん明るくなっていく時間の流れを表現したくて、初めてグラデーションを描いたんです。《明ける頃》という作品も描いたんですが、「頃」というタイトルが多いのは、曖昧さを保って決定づけない、というのが私にとって魅力的なんです。《untitled (bloom)》という作品もあって、最近、untitledの後に括弧つきでgreenとかpinkという作品があるんですけど、2年ほど前に東京国立近代美術館で、クロード・ヴィアラの《untitled (ばら色)》を観たんです。あ、素敵、と思って(笑)。お正月に観たんですけど、晴れやかな気持ちになって。タイトルは大事だなと思って、真似してみました。

山田 無題じゃないけど、イメージを限定せず、開かれている。

平丸 2023年のwalls tokyoの個展は「呼吸/bress」というタイトルにしたんです。「呼吸」は目に見えないんですけど、絶対に必要という意味を込めて。漢字だけだと堅苦しいと思って、「/bress」を加えました。

山田 タイトルは最後につけるんですか。

平丸 最初のイメージがあって、最終的に決めるのは描き終わってから。いろいろな言葉を書き出しておいて、最後にくっつけたり、削ったりしているという感じですね。

山田 色を重ねる間に、変わっていくことはありますか。

平丸 描いていて、思った以上に面白い方向になってきたなというときは、そっちに行ったりしますよね。

山田 アトリエは地下なんですか。外光は？

平丸 ほぼ入ってこなくて。でも、すごく良いんです。前のアトリエは2階の日当たりの良いところだったんですけど、昼間に描いていると日の色で見え方が変わってしまうんですよ。夜だと光が変わらないので、それから夜に描くようになったんですけど、地下だと光の問題は大丈夫かなと思って。

山田 モネの外光派とは逆ですね。安定した環境で、平丸さん自身のその時々々のムードや最初のイメージで描いていく。

平丸 ひとつの図像が浮かび上がっていくまで時間がかかるので、その間に光が変わると迷いが生じてしまいそうで、一定の光の方が安定する。物理的にも地下に潜っているので、集中できるんです。でも絵を階段の上に運ぶのが重くて。描き終わった後はハイテンションなんですけど、次の日に起きたら体が動かなくて、金縛りか!?と思ったら筋肉痛だった。でも次の日に来るからまだ若いですよ(笑)。

山田 雰囲気という言葉は、もともと気象用語なんですよ。良くも悪くも、外光とか環境の影響が働くんですけど、平丸さんの絵はそうではない。

平丸 描くときは画面に集中するんですけど、その前に思い描くイメージは自然から……賀茂川は空が開けているんですね。夕方に歩くときにいちばん好きで、だんだん明るさと色合いが変わってくるのは、すごく刺激的だと思っています。それでグラデーションに興味を持ちはじめたんです。

山田 最初にある程度、メディウムや筆致が見えていながら、積み重ねていく。シルバーも使われるんですか？

平丸 今回展示した絵には使っていないんですが、シルバーも魅力的な色だと思っていて、光の影響をすごく受ける。ゴールドもそうなんですけど、もともとは薄暗い日本家屋のなかで、ろうそくの光が少しでも明るくなるように使われていたそうです。私は全面に使うことはないんですけど、見え隠れすると面白いと思っています。先日、二条城でアンゼラム・キーファーの展示を観たら、素晴らしかったんですよ(笑)。二条城ができた頃は電気もなかったので、基本的に照明を使わずに、金箔や金を多用して。

山田 「雰囲気のかたち」のとき、来た人がどれか一点、自分の心情にぴったりくる絵を撮影して良いですよ、という試みをしたんですが、皆さん厳選されて、SNSのコメントにも深度があったんです。同じ人が観ても、その日の心情や記憶を背負って作品と対峙するんだなと思って。平丸さんの作品も具象画でない分、何を描いているのかとずっと聞かれ続けていると思うんですけど、観る人は自分に気持ちを寄せて作品と対峙する余地がある。開かれている絵だと思います。

平丸 私の作品は限定的なものを描いていない分、空間によって見え方が変わるんですね。それが楽しみでもあって。それから、私は一貫して油絵具を使っているんですけど、目に見えないかたちで絵具は少しずつ変化していくんですよ。10年、20年経って、特に明るい色は落ち着いていく。

山田 存在は見えないんだけど、たしかにあるものが、それ自体も移ろっていて、繊細な何かを引き受けることができるところが、これからも楽しみですね。

(まとめ:岡村幸宣)